

イタリアの学校と社会で推進される多様な学習者をつなぐ

楽器演奏指導の方法と可能性

—中学校音楽コースとインクルーシブ・オーケストラ“Esagramma”の

エザグラマ

取り組みを中心に—

中嶋俊夫

Methods and Possibilities of Teaching Musical Instruments to Connect Diverse Learners

in Italian Schools and Society—Focusing on a Junior High School Music Course

and the "Esagramma" Inclusive Orchestra—

Toshio Nakajima

1. はじめに—インクルージョンに向けたイタリアの音楽教育普及施策—

イタリアでは2000年以降アウトノミア（autonomia：学校の自律）の名の下に教育改革が進められ、各学校のイニシアティブによる特色ある学校づくりが振興した。2012年に公示された現行の学校カリキュラムである『幼稚園と第1学校課程¹のカリキュラムに関する国家ガイドライン』（MIUR 2012）と、その継続的实施と充実化のための要点が示された「国家ガイドラインと新たな局面」（MIUR 2018）において、時代に即したイノベティブな教育環境・実践と同時に、学校が取り組むべき市民権教育、インクルージョン、インターカルチャーの課題を重視し、全ての人に質の高い教育と学習の機会が与えられ、一人一人の多様な学び方を保障する教育政策が推進された。これら教育政策において芸術は、市民の成長に必要なツールとして、そしてコミュニケーション、インクルージョン、多様な文化の理解、インターカルチャーな関係性を促進させるものとして価値づけられている。この教育改革が目指す方向は、2015年7月13日付発令の法律107号²「国の教育制度の改革と有効な立法規定の再編のための委任」（通称「La Buona Scuola ブオナ・スクオーラ」）と、このブオナ・スクオーラ改革の実施法令の1つである2017年の政令第60号³「人文文化の促進、文化的遺産および作品の価値付け、創造性の支援に関する規則」により、学校改革の実現に即した具体的な方策が示され、特に後者の政令第60号では、各学校段階で全ての児童・生徒・学生が人文文化と芸術にアクセスすることを保障し、様々な芸術形態を通して創造性の育成を支援するために、カリキュラム研究・実践の促進、教育・研究・文化芸術振興機関、第3セクターとの連携の推進を奨励した。中嶋（2023）では、これら教育改革と連動して、イタリアの教育・大学・研究省（Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca, 以下MIUR）の組織として設立した「全ての学生の実践的音楽学習のための全国委員会（Comitato Nazionale per l'apprendimento pratico della musica per tutti gli studenti）」⁴と「教育の研究・ドキュメンテーション・イノベーションの国立機関」（INDIRE：Istituto

¹ 第1学校課程（primo ciclo d'istruzione）は小学校と中学校。イタリアの小中学校の約8割は小中一貫校である Istituto Comprensivo の制度を採っている。

² Legge 13 luglio 2015, n.107

³ Decreto Legislativo 13 aprile 2017, n.60

⁴ 「学生（studenti）」は就学前から高等教育までの全ての学習者を指している。

Nazionale Documentazione Innovazione Ricerca Educativa) が連携して推進した音楽教育普及のためのプロジェクト活動について報告されている。この教育改革と音楽教育普及施策の背景には、イタリアで 1970 年代から学校のフルインクルージョンに取り組んできた経緯がある⁵。またイタリアの教育現場では、音楽の役割が身体、精神、感覚、認知、運動、発達、感情、言語、コミュニケーション、関係性、調和、社会性、協働性など、多様な局面を統合する働きをもたらすこと、音楽に誰もがアクセスできることについて、音楽療法的な視点からも共通認識されている。

以上の動向をふまえ、本稿ではイタリアの中学校音楽コースとインクルーシブ・オーケストラ「エザグラマ」(Esagramma)を研究対象とし、音楽によるインクルージョンという目的が、楽器演奏の指導と習得においてどのように進められているかについて明らかにしたい。なお、イタリアの中学校音楽コースの現状については、大野内(2020)の同コース視察報告がある。本稿はインターネット資料をもとに論考した研究報告である。

2. 中学校音楽コースの概要

(1) 中学校音楽コース設置の現状と設立の経緯

イタリアの普通公立中学校に音楽コース(Percorsi ad indirizzo musicale)が設置されており、その数は全中学校数 8,057 校(ISTAT 2021-22 年度)のうち 1,845 校(全中学校の 23%)に及ぶ(Rizzo 2022, p.112)。音楽コースを設置している中学校を Scuola Media ad Indirizzo Musicale(以下 SMIM)と呼ばれる。SMIM に通学する全生徒が音楽コースに在籍しているのではなく、普通カリキュラム(必修)を履修しながら一部の生徒が音楽コースの選択カリキュラムを履修する形態をとっている(図 1)。

イタリアの中学校の週当たりの授業時間数は、原則 30 時間、それに加えて学校のカリキュラム編成によって週 36 時間、最長 40 時間の延長が認められる(大統領令第 89 号[2009 年]第 5 条)。音楽コースはこの延長時間の範囲内で運営される(時間数については後述)。普通カリキュラムの科目は図 1 に示した通りであるが、音楽の授業は全生徒共通科目として原則週 2 時間行われている(勅令第 254 号[2012 年])。音楽コースにはイタリアの全中学生数 1,706,482 人(ISTAT 2021-22 年度)のうち約 120,000(全体の 7%)が在籍している(FLC CGIL 2020)⁶。

この中学校音楽コースは 1970 年代にロンバルディア州ミラノ県の 18 の公立普通中学校

普通中学校カリキュラム	
標準時間割	週30時間
*延長時間割週36時間まで、特別に許可された場合は40時間まで。	
教科	<ul style="list-style-type: none"> ○イタリア語 ○歴史 ○地理 ○数学 ○科学 ○英語 ○第二外国語 ○技術 ○美術 ○運動科学とスポーツ ○音楽(3学年とも週2時間) ○宗教(カトリック)または代替の活動
(2012年勅令第254号)	
♪音楽コース Percorsi ad indirizzo Musicale	

図 1 普通中学校カリキュラムと音楽コース

⁵ 「障害のある子供と学校教育の権利」(法律 118 号[1971 年], 法律 104 号[1992 年])において、保育園、幼稚園から大学まで全ての障害を持つ児童・生徒・学生の地域の学校での就学の権利、障害のない者と同様に普通学級での教育を保障。

⁶ 得られたデータの年度が 1 年異なっているが、目安として示される。FCL CGIL(2020)ではコース数は、2,000 以上あるとされている。

で楽器教育が実験的に始められたことに由来する（省令 D.M.3 agosto 1979）。この音楽の実験的コース（Corsi sperimentali ad orientamento musicale）はイタリア全土に徐々に拡大し、コースのカリキュラムや運営について規定された省令（D.M.13 febbraio 1996）と、それに続く法律第 124 号（1999 年）と省令第 201 号（D.M. n.201, 6 agosto 1999）により公的に整備され、イタリアの学校制度の中に正式に認可された。これら法令が適応された 2000 - 2001 年度当初のコース数は 466 であった。そして 2022 年の省令第 176 号（D.M. n.176, 1 luglio 2022）「中学校音楽コースに関する省令」⁷により、同コースの運営について刷新が図られた。

（2）中学校音楽コース開設の目的

中学校音楽コースの刷新を図った省令第 176 号（2022 年 7 発 1 日付）の第 1 条第 3 項では、同コース開設の目的が次のように述べられている。

音楽コースは技術的・実践的な側面と、論理的・語彙的・歴史的・文化的な側面を統合することによって、生徒が音楽言語をより意識的に習得できるようにするものであり、不利益な状態（svantaggio）にある生徒にも統合と成長の機会を提供するものである。音楽コースでは、楽器の学習は年間カリキュラムにおいて必須であり、学校の教育課程の基準に沿って運営される。（省令第 176 号，第 1 条第 3 項）

本音楽コース開設の目的は、初めにコースを認可・規定した法律第 124 号（1999 年）と省令第 201 号（1999 年 8 月 6 日付）から基本的に変わっていない。楽器教育を主軸とする同コースの趣旨について、省令第 176 号（付帯資料含む）から以下の内容が読み取れる。

- ・楽器を学ぶことは、知識、技術、創造的表現による音楽の多言的で学際的な教育方法であり、グローバルな人間形成とともに、共感、発想、経験、感情表現、解釈、理解、コミュニケーションなどの能力を培う。
- ・音楽固有の教育的機能である楽器の習得を通して、文化・認知、言語・コミュニケーション、感情・情緒、アイデンティティ、異文化間の関係性、批判的理解、美的感性の力を養う。
- ・アンサンブルにおいて演奏技術、解釈、作曲的・即興的スキルを身に付ける。
- ・オーケストラやアンサンブルの活動は、他者との関係、社会性、自己、共同体参加、インクルージョンの認識を促進させる。
- ・障害を持つ生徒や不利益な状況に置かれた生徒に音楽学習の機会が与えられる。

本コースは、国の教育課程と各学校の教育計画に沿って運営され、修了要件として国家試験（進路の選択・決定と連携する）が課せられる。また、障害を持つ生徒・不利益な状況に置かれた生徒についての記述は、1996 年の省令から一貫して変わっていない。本コースは無償にて提供されている。

（3）音楽コースの概要

- 1）時間数：週 3 時間，年間 99 時間（延長時間割の範囲内）

⁷ Decreto recante la disciplina dei percorsi a indirizzo musicale delle scuole secondarie di primo grado.

2) 楽器専攻

各 SMIM の音楽コースに 4 つの楽器専攻が設けられており、生徒は原則 3 年間同じ楽器を専攻する。選択できる 4 つの楽器の種類は各音楽コースの運用によって決められる（生徒への楽器貸与もある）。1 楽器を 1 人の指導者が担当し、コースは、基本的に 4 つの楽器専攻を指導する 4 人の教師により運営されている⁸。学年ごとに 1 クラス、3 学年で 3 クラスを各楽器担当教師が指導し、1 人の教師の指導時間は週 6 時間となっている。また楽器専攻 1 クラスの生徒数は、原則 8 人以下となるよう編成されなければならない。

○L.トロンビーニ中学校（Scuola Secondaria di Primo Grado“Luigi Trombini”）⁹の例

*学級数：12

*生徒数：257 人

*音楽コース生徒在籍数：82 人（中学校全生徒数 257 人の 32%）

*専攻楽器と選択者数（3 学年の合計）：フルート 19 人，クラリネット 24 人，ヴァイオリン 20 人，ピアノ 19 人

※いずれも 2020-2021 年度データ

3) 科目

a) 専攻楽器のレッスン（個人またはグループ）

b) 音楽理論・ソルフェージュ

c) アンサンブル・オーケストラ

4) オリエンテーション適性検査

音楽コース履修希望生徒に楽器演奏の経験や読譜力は求められないが、次のような簡単な適性検査が課せられる。

○リズムに関する検査例

提示された 2 つのリズムパターンが同じか異なるかの判別。

○音高・旋律に関する検査例

提示された 2 つの音の高低の判別，提示された 2 つの旋律が同じか異なるかの判別。

（4）省令第 176 号における「適性検査」の指針

音楽コース設立当初から現在まで、障害を持つ生徒や不利益な状況に置かれた生徒に対する方針は変わっていないが、実際の学習指導の方法や体制づくりについては、各コースの采配に任されてきたという現状がある。省令第 176 号は、コースの編成規準や運用について規定しており、2023-2024 年度から適応されている。コースの時間編成，専攻楽器の選定，評価方法等，各コースで規定すべき要件と実施体制を整えるよう指示されている。その中で「障害や学習障害を持つ生徒に対するオリエンテーション適性検査実施方法」を検討・実施するよう求められている。これを受けて各コースでは、具体的な対応に向けて動き出している。先述の L.トロンビーニ中学校音楽コースでは、適性検査について次のようなインフォメーションを出している。

⁸ 楽器指導者は正規の教員ではなく、教育委員会が提示する要件を満たしているものにその資格が認定されている。

⁹ ロンバルディア州ソンドゥリオ県ティラーノ市在，同市の人口は 8,800 人。同校の音楽コースについては <https://www.ictirano.edu.it/pagine/smim--scuola-media-a-indirizzo-musicale> を参照。

・障害の認定を受けた生徒や学習障害（DSA）を持つ生徒は、他の志願生徒のために用意された適性検査が障害に適合しない場合、また個人の精神的・身体的能力に適合しない場合に限り、差別化された検査を受けることができる¹⁰。

3. 中学校音楽コースのインクルージョンに向けた課題—ローマ3大学教育科学部の調査研究より—

（1）調査研究「楽器と学校のインクルージョン」

2022年2月25日（9：00～17：00）に「楽器と学校のインクルージョン」（Strumento musicale e inclusione scolastica）というテーマの研究大会が、ローマ3大学（Università degli studi Roma Tre）で開催された（オンライン・対面の併用）。この研究大会は、ローマ3大学教育科学部が母体となって、MIURの「全ての学生の実践的音楽学習のための全国委員会」と協力して2020-2021年度に、中学校音楽コースにおけるインクルージョンの向上を目的として実施された調査研究「インクルーシブ教育における楽器教育：障害や限局性学習障害のある生徒の学習と参加の促進か障壁か？中学校における全国調査」（L'insegnamento dello strumento musicale nella didattica inclusiva: facilitatore o barriera per l'apprendimento e la partecipazione degli allievi con disabilità e con disturbi specifici dell'apprendimento? Una ricerca nazionale nella scuola secondaria di I grado. 研究代表者：ローマ3大学教育科学部准教授 A. Rizzo）の成果発表という位置づけで企画されている。大会では本調査研究に携わった14人の研究者、教育者などが講演や問題提起を行い、中学校音楽コースの教育実践におけるインクルージョンについて、創造性、実践方法、評価、情緒的・認知的発達、楽器教育、アンサンブル・オーケストラ指導の観点から協議が交わされた。研究の成果はRizzo（2022）にまとめられている。

図2は本調査研究のテーマを示している。このテーマと連係して、研究大会「楽器とインクルージョン」のプログラムは下記の通り組まれた。

- ・楽器指導における情動面の重要性（B. De アンジェリス）
- ・インクルーシブ評価について（C. コルシーニ）
- ・中学校音楽コースの変遷、内容、展望（A. スパドリーニ）
- ・インクルーシブ実践：難しいバランス（L. ロペス）
- ・思春期の感情的および認知的発達のための音楽学習カリキュラム（E. ブラッティコ、M. リッポーリス）
- ・中学校音楽コースのインクルージョンのレベル（M. キアーロ）

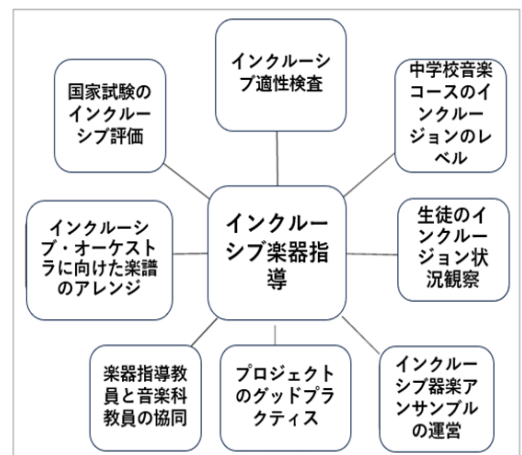


図2 調査研究テーマ（Rizzo 2022, p. 27）

- ・インクルーシブ楽器教育：聴取、観察、関係性（M. T. リエッティ）
- ・インクルーシブ楽器教育：グループのケア（F. ヴェルガーニ）
- ・インクルーシブ楽器指導法：効果的な戦略とスコアの再構成（G. ルビーノ）
- ・SMIM エントリーの試み：インクルージョンの提案（M. クロツポ）
- ・SMIM のインクルーシブ・グッドプラクティス（F. ピロッティ）
- ・州の試験で楽器テストを評価する方法は？ インクルーシブ評価のためのガイダンス（F. セバステ

¹⁰ <https://www.ictirano.edu.it/pagine/smim--scuola-media-a-indirizzo-musicale> を参照。

ィアーニ)

(2) 調査の概要 (Rizzo 2022, pp.112-141)

①調査対象：音楽コースが設置されている中学校 (SMIM) 1,845 校

②回答率：回答校数 1,245 校 (67.5%)，うち有効回答校数 1,060 (回答校数の 85.1%，全体の 57.5%)

(3) 調査結果から

(結果に示される%は有効回答数を 100 とした割合)

本調査によると、SMIM で音楽コースに在籍する生徒の割合は平均 21.8%である。18 の各州ごとに在籍する生徒数、それに対する障害のある生徒の在籍の割合が報告されているが、それら詳細については本稿では割愛

し、全体の結果の 1 部を示していく。本調査では障害

(Disabilità) を持つ生徒と学習障害 (限局性学習障害 Disturbi Specifici dell'Apprendimento : DSA) を区分して報告されている。表 1 は、SMIM で普通カリキュラムを履修する生徒と音楽コースを履修する生徒全体に対する障害を持つ生徒の割合を示している。表 2

は、音楽コースにおける障害を持つ生徒の人数ごとの割合を示しているが、この 2 つの結果から研究グループは、音楽コースのインクルージョンのレベルが低いこと、そして障害を持つ生徒が在籍していない (0 人) コースが一定数あることを問題視し、改善に向けての根拠を見いだしている。特別支援教育の資格を持つ楽器指導者の有無については、いる (14.2%)，いない (83.3%)，わからない (2.5%) という結果が現状を伝えている。表 3 は、楽器の種類ごとに障害を持つ生徒の楽器選択状況を示している¹¹。表 4 は、オリエンテーション適性検査のインクルージョンへの対応状況、表 5 からは、指導者の現状に対して身に付けたい知識・技能や指導力の課題が見て取れる。

(4) 調査結果から示される課題

本調査から見えてくる課題として、1) 障害を持つ個々の生徒の特性に応じた指導計画・方法の充実、2) 支援員を含むスタッフ・教員・指導者

表 1 障害を持つ生徒の割合

	障害を持つ生徒	学習障害を持つ生徒
SMIM 全体	4.7%	5.8%
音楽コース	2.5%	4.5%

表 2 障害を持つ生徒数の割合

	障害を持つ生徒	学習障害を持つ生徒
1 人	28.0%	15.7%
2 人	17.0%	14.0%
3 人以上	26.3%	50.7%
0 人	28.7%	19.6%

表 3 障害を持つ生徒の楽器種類ごとの選択状況

楽器	障害を持つ生徒	学習障害を持つ生徒
管楽器	51.0%	69.1%
ピアノ	45.5%	53.7%
撥弦楽器(ギター他)	32.5%	46.6%
弦楽器(ヴァイオリン, チェロ他)	22.8%	36.4%
打楽器	26.9%	24.7%
電子楽器	1.1%	1.2%
その他	4.7%	3.9%
未確認	0.3%	1.3%

表 4 適性検査実施状況

	障害を持つ生徒	学習障害を持つ生徒
他の生徒と同じ検査を実施	45.3%	65.7%
障害の特性に合わせて実施	41.8%	28.5%

¹¹ 本調査によると、回答した 1,245 校の音楽コースで選択できる楽器 (各コースで 4 つ設定) の割合は、ピアノ 92.4%、ギター 79.3%、ヴァイオリン 61.4%、フルート 60.1%、クラリネット 44.4%、パーカッション 27.2%、トランペット 17.2%、サクソフォン 13.9%、チェロ 13.1%、オーボエ 5.5%、アコーディオン 3.5%、ホルン 2.9%、ハープ 2.0%、ファゴット 1.1%、その他 1.0%となっている (Rizzo 2022, p.117)。

の連携, 3) 楽器指導者の養成, 4) オリエンテーション適性検査方法の検討, 5) 小学校との情報交換, 6) コース履修希望生徒とその家族に対するインフォメーションの充実, が挙げられている。本研究調査によって, 中学校音楽コースにおける楽器教育のインクルージョンに向けて具体的な課題とその改善の方向性が示された。それが, これからイタリアの学校で, 全ての学習者に向けた音楽教育普及施策を進めていく中で, 規範的な役割を果たすことが期待される。

表5 指導者が研修したいと考えている項目

テクノロジーの活用	67.5%
楽器演奏を補完する身体活動の活用	58.0%
障害を持つ生徒の個別教育計画の作成	57.4%
学習障害を持つ生徒の個別教育計画の作成	55.9%
学習障害についての規定(規準)	53.7%
障害についての規定(規準)	53.0%
学習障害を持つ生徒の評価	44.3%
障害を持つ生徒の評価	43.2%

4. インクルーシブ・オーケストラ「エザグランマ」(Esagramma)の創意と実践

(1) インクルーシブ・オーケストラへの視点

先述のローマ3大学教育科学部が主導した調査研究「楽器と学校のインクルージョン」のメンバーであるG. ルビーノ(G. Rubino)は, インクルーシブ・オーケストラを指導してきた立場から同研究大会において「インクルーシブ楽器指導法:効果的な戦略とスコアの再構成」(Didattica strumentale inclusiva: strategie operative e rielaborazione delle partiture)¹²というテーマで講演している。また, 第33回全国音楽祭「音楽は学校を一つにする」¹³(2022年5月9日~14日開催)のウェビナー「インクルージョンを構築する—全ての人がアクセスできるオーケストレーションを実現するための原理と戦略」(Comporre l'inclusione: principi e strategie per realizzare orchestrazioni accessibili a tutti)¹⁴の講師を務め, これらの内容はRizzo(2022)においてまとめられている(Rubino 2022)。

ルビーノは, コンセルヴァトリーオでクラリネット, ジャズ, 指揮を専攻, 大学では臨床心理学を修めている。2016年からインクルーシブ・オーケストラ「エザグランマ」(Esagramma)の活動に指導者・指揮者として携ってきた経験を生かし, 小中学校の音楽プロジェクトや中学校音楽コースにおいて, 障害や学習面で困難を抱える生徒の楽器演奏やアンサンブルの指導実践の方法について提案し, 自らの実践を通して成果を示している(後述)。

(2) エザグランマの創設と楽器演奏による療法的活動¹⁵

エザグランマ(ONLUS:社会的有用性のための非営利団体)は, 1983年に障害者のための心理療法, リハビリテーション, インクルーシブ教育の研究機関としてミラノ市に創設, オーケストラ活動による音楽療法の実績はイタリア国内外で高い評価を得ている。楽器演奏を運動機能, 認知, 心理の局面から捉え, 療法



図3 エザグランマのウェブサイトから

¹² https://www.youtube.com/watch?v=JqAkalYX_xY (ウェビナーによる講演)

¹³ MURの「全ての学生の実践的音楽学習のための全国委員会」とINDIREの共催。

¹⁴ <https://www.youtube.com/watch?v=UZ4f7zDcrRQ> (ウェビナーによる講演)

¹⁵ <https://esagramma.net/eoi-e-orchestra/>

的活動を進めるとともに、障害のある人が演奏に参加し、特性に応じて能力を発揮しながら音楽的に向上することを目指している。オーケストレーションを工夫したアレンジ、認知や運動の特性に配慮した楽器奏法習得のメソッドは、イタリア国内とヨーロッパを中心に普及しつつある。

エザグランマの創設者 P.セクエーリ (P.Sequeri, 大学教授, 神学者, 哲学者, 音楽家) と L.ズバッテッラ (L.Sbattella, 大学教授, 生物工学者, 臨床心理療法士, 音楽家) は、1970年代半ばから障害をテーマに研究・支援活動を始め、1983年にオーケストラ音楽療法に着手し、1987年に応用音楽学研究所を発足、「全ての人のための音楽トレーニングプログラム」を開発、1991年に指導者養成を始め、1991年に最初のサテライトセンターをノヴァーラ市に設立、2010年までにイタリア全土に13のサテライトセンターを開設する。1997年に「エザグランマ交響楽団」(L'Orchestra Sinfonica Esagramma) が創立、当初の楽団のメンバーは、エザグランマ・メソッドを受けた20人の障害者と15人の音楽家から構成され、障害者と音楽家が、支援する・される立場ではなく、共に一つの音楽を創り上げる同志としてオーケストラ活動が運営されるという基本方針が示された。ローマ教皇主催のセレモニーや欧州議会での演奏他、イタリア国内外で2000年以来170回以上のコンサートを開催し¹⁶、2008年にはユニセフ特別賞を受賞している。

(3) エザグランマのポリシーとメソッドへの指針 (エザグランマのウェブサイトより)

エザグランマのオーケストラによる音楽療法活動のポリシーとメソッドへの指針は、以下の通り示される。

1) オーケストラ音楽療法活動のポリシー

- ・全ての人には、人生を豊かにするために芸術や文化に触れる必要と権利を持っている。
- ・音楽とオーケストラは、全ての人間にとって実りあるかけがえのない成長の機会である。
- ・不利益な状況にある人、困難を抱えた人、深く傷ついた人が共に責任を果たせる空間を持つ。
- ・自分の働きと独創性の成果を他者に贈ることで、本当の感謝を受け取れるようになる。
- ・文化や思想への複雑な形態を伴ったアクセスを、偏見によって妨げられてはならない。

2) メソッドへの指針

- ・障害のある人々に本物の楽器を使う機会を与える (下線筆者)。
- ・オーケストラ・アンサンブルによる複雑な音楽を、単一の散漫な音に止まるのではなく、グループの文脈 (関係性) の中で一貫した動作で演奏できること。
- ・誘導、心理的観察と解釈の記録、個人プロファイリング、得られたデータと分析結果を有機的に生かし、効果を確実にするために支援者を配置する。

5. 「インクルーシブ楽器指導法：効果的な戦略とスコアの再構成」(Rubino 2022)

ルビーノのインクルーシブ楽器指導法の中核にあるのは、多様な特性を持った人が参加できるアンサンブルのためのスコアの再構成とオーケストレーションへのアプローチである。それは、メンバーの実際的な参加を決定づけること、そして個々に異なる声、スキル、ニーズを統合するために「視

¹⁶ レパートリーは、グリーグの《ペールギュント》、ヴェルディのオペラ《仮面舞踏会序曲》、ベートヴェンの《交響曲第9番》第4楽章、マーラーの《交響曲第1番》第1楽章、ドヴォルザークの《交響曲第9番・新世界》第2楽章、ストラヴィンスキー《ペトルーシュカ》、ブラームスの《ハンガリー舞曲第1・5番》ほか。

(https://esagramma.net/wp-content/uploads/2021/02/ELENCO-CONCERTI-Orchestra-Esagramma-2000-2020_agg05-02-21.pdf)

覚的・音響的イメージ」を与えることを可能にするとルビーノは考えている。インクルーシブ・オーケストラ・エザグランマの演奏活動に長年携わってきた経験から、音楽グループ内の多様な参加者の可能性を高めるためのいくつかの原則と音楽的構成戦略について、ルビーノは下記の視点と項目を挙げている。

(1) インクルージョンの3つの指針

インクルージョンの指針として次の3つの局面が、参加メンバー1人1人の活動の中で進展することが大切である¹⁷。

- 1) 存在 *Presenza*, 2) 参加 *Partecipazione*, 3) 進歩 *Progresso*

(2) ユニバーサルデザインの視点

- 1) 最小の楽器演奏の技術を使って参加できる。
- 2) 読字障害者、協調性障害者、持続性注意障害者など、それぞれの障害の特性に応じて参加できる。

(3) 作品を構成する条件

- 1) 最小限の動作（ジェスチャー）を生かし、それを高めることができる。
- 2) 明確に理解できる（判別しやすい、特徴づけられた）パートを組み合わせる。
- 3) リズムに協調できない人でもアクセスできる。
- 4) 長すぎず、繰り返しを生かしたセクションを設定する。
- 5) テンポ、強弱、ハーモニーなどが明確に変わる場面展開をつくる。

(4) 音楽表現におけるインクルージョン

- 1) 音楽イベント成功のためには、メンバー全員が不可欠であると認識されなければならない。
- 2) 技術的なコントロールが難しく、単純な動作であっても、他の音楽要素との相互関係によって複雑な音楽をつくる要素となる。
- 3) 音楽構成の作業を文脈のあるものにしていく。

(5) 進歩

- 1) 音楽のシンボリックな解釈の次元を獲得する、音楽的な動作に意味を持たせる、それはだれもが手に届くところにある技術である。
- 2) 音楽的な動作と関連づけられる練習をする。

(6) 単純な動作を磨く

最小限の動きや働きに構造的な意味を持たせる作曲の工夫をする。

- 1) セクションを作る、拡張する。
- 2) 旋律相互の会話を生かす。
- 3) 保続和音を使う。
- 4) 半音階と多調性の要素を入れる。
- 5) レチタティーヴォの要素を入れる。

(7) 音楽的形式を自分のものにする

演奏テンポの維持、拍子、リズム、ダイナミクスなどの要素に注意を促し、感情と関わらせたりすることで音楽的形式を獲得できるようにする。

¹⁷ ルビーノは Ainscow と Piccioli を引用している。

(8) インクルーシブ・アレンジ

- 1) 能力に応じた異なるアクセスの方法を工夫する。
- 2) 音楽の構造的な豊かさを伴わせる。
- 3) レパートリーの多様性, 実践性にこだわる。
- 4) 演奏を休む時間をつくる。
- 5) 分解と再合成: 原曲の特徴的な要素を生かす。
- 6) メンバー全員の価値ある参加, グループの可能性を保証するオーケストレーションの工夫。
- 7) グループ内の演奏者同士が音の相互作用の魅力を再発見できる工夫。
- 8) 聴き手が美的体験を共有できる。

Munter und straff. Soldatenmarsch.
R. Schumann - Marcia dei soldati. Bb. 1-8

譜例1 シューマン《子供のためのアルバム》「兵士の行進」のアレンジ (Rubino 2022, p. 265)

5. まとめにかえて

(1) エザグランマ・メソードの学校現場への還元

エザグランマのサテライトはイタリア国内外に現在 14¹⁸あり, 音楽療法とインクルーシブ・オーケストラのメソードは着実に普及している¹⁹。ルビーノらのインクルーシブ・オーケストラの実践は, エザグランマとのパートナーシップによるプロジェクトという形で一般の学校の活動にも還元され, 音楽によるインクルージョンが推進されている。下記はその例である。

1) やってみようオーケストラ—最出発にむけて再び響きだす学校— (Progetto Prova L'Orchestra “Una scuola che ri-suona per ripartire insieme”)²⁰

ミラノ市にあるトゥリルッサ小中学校 (I.C. Trilussa di Quarto Oggiaro) でのプロジェクト活動。この学校には, 特別な支援を必要とする児童生徒が全体の約 25%通学している。ミラノ市コミュニティ財団からの資金援助により, 2022年3月~9月に実施, のべ500人以上の児童生徒, 家族, スタッフ, ボランティアが参加して, 楽器演奏体験やアンサンブル活動が継続的に展開された。

2) 音楽, 共に成長するための道具 (Musica : Strumenti per crescere insieme)

ロンバルディア州コモ市にあるコモ・ボルゴヴィーコ小中学校 (I.C. di Como Borgovico) で 2021-

¹⁸ Bergamo, Borgomanero (NO), Darfo Boario Terme (BS), Firenze, Foggia, Gravellona Toce, Messina, Novara, Piacenza, Roncadelle (BS), Salò (BS), Senago (MI), Vercelli, Lille (France)

¹⁹ 他には, フィレンツェに拠点がある L'Associazione In-Armonia の音楽療法とオーケストラ活動 (Orchestra Regionale Inclusiva della Toscana) など類似団体があり, エザグランマと並んで活動が注目される。

²⁰ Prova L'Orchestra (<https://esagramma.net/report-progetto-prova-lorchestra/>) を参照。

2022 年度に計画されたプロジェクト。知的障害・自閉症の子供たちのための音楽ラボラトリと、中学校音楽コース生徒との協働による演奏活動²¹が展開された。

上記例のようなエザグランマに代表される音楽療法の実践に基づいた楽器演奏とインクルージョンに向けた音楽実践が、今後モデルケースとなってイタリアの学校に普及することが期待される。

(2) 展望と課題

最後に本研究のまとめとして以下の5点を挙げておきたい。

- 1) 音楽にはインクルージョンを推進する力があり、子供の成長と豊かな市民社会の形成に欠かせないものである。
- 2) 学校と社会で音楽によるインクルージョンを実現させるために、その方法論と体制づくり(行政、学校、研究機関、第3セクター、人的・物的支援のネットワーク)が確立されなければならない。
- 3) 方法論を定着させ実践するために、指揮法、演奏法、作曲法などの音楽の専門性に加えて、心理、認知、運動、療法など領域を横断する知識と経験が、指導者と指導サポート・チームに求められる。その人材育成のための教育・研修が必要である。
- 4) 指導者、サポーター、学習者は信頼関係で結ばれる一つのチームとなり、演奏の成功を喜び合う仲間である。
- 5) 学校や社会の中で、音楽とインクルージョンが文化として根付いていることが大切である。

我が国の学校音楽教育の未来について論じる際、多様な子供たち個々への対応と、個性や特性の異なる子供たちをどうつなぐかが喫緊の課題であると言えるだろう。学校では、スタンダードな教科教育の実践・研究と、それと並行して、多様な子供たちをつなぐ共創的音楽活動の実践・研究の両輪を起動させて音楽教育を推進していかなければならないと考える。本研究報告がその一助になるよう願って結びとしたい。

引用文献・インターネット資料

FLC CGIL (2020) *Corsi ad indirizzo musicale della secondaria di I grado: una esperienza da consolidare e rilanciare.*

(<https://www.flcgil.it/scuola/corsi-ad-indirizzo-musicale-della-secondaria-di-i-grado-una-esperienza-da-consolidare-e-rilanciare.flc>)

MIUR (2012) *Indicazioni Nazionali per il curricolo della scuola dell'infanzia e del primo ciclo d'istruzione.*

(幼稚園と第1学校課程のカリキュラムに関する国家ガイドライン)

(https://www.miur.gov.it/documents/20182/51310/DM+254_2012.pdf/1f967360-0ca6-48fb-95e9-c15d49f18831?version=1.0&t=148041849426)

MIUR (2018) *Indicazioni Nazionali e Nuovi Scenari.* (国家ガイドラインと新たな局面)

(<https://www.miur.gov.it/documents/20182/0/Indicazioni+nazionali+e+nuovi+scenari/>)

Rizzo, A. L. (2022) (a cura di) *Strumento musicale e inclusione nelle SMIM – Ricerche, itinerari didattici e processi valutativi* (中学校音楽コース SMIM における楽器とインクルージョン—研究, 指導方法, 評価のプロセス), Milano, FrancoAngeli.

²¹ 動画参照 (<https://icomoborgovico.edu.it/musica-e-inclusione-progetto-musica-strumenti-per-crescere-insieme-il-video/>)

Rubino, G. (2022) *La classe è una musica che incanta. Orientamenti pedagogici e strategie didattiche per l'utilizzo e la predisposizione delle partiture del gruppo musicale inclusivo nelle SMM (クラスは魅惑的な音楽 —SMIM におけるインクルーシブ・ミュージック・グループ・スコアの準備と活用のための教育学的ガイドラインと指導戦略)*, *Strumento musicale e inclusione nelle SMIM – Ricerche, itinerari didattici e processi valutativi*, (a cura di Rizzo, A. L.), pp.241-273, Milano, FrancoAngeli.

大野内 愛 (2020) 「イタリアの公立中学校音楽コースにおけるインクルーシブ教育の実際—A 中学校の視察を中心に—」『教育学研究紀要』中国四国教育学会, 第 66 巻, pp. 340-344.

中嶋俊夫 (2023) 「イタリアの学校改革における全ての学生のための音楽教育普及施策の動向について—全国音楽委員会と INDIRE が推進するプロジェクト活動を中心に—」『横浜国立大学教育学部研究紀要 I』(教育科学) 第 6 集, pp.194-210.

(イタリアの法令)

省令第 176 号 (D. M. n.176,1 luglio 2022, 「中学校音楽コースに関する省令」)

(https://www.miur.gov.it/documents/20182/6735034/m_pi.AOOGABMI.Registro+Decreti%28R%29.0000176.01-07-2022.pdf/e0dae97c-e51f-a641-c5b5-59392163a777?version=1.0&t=1662382636446)

法律 107 号 (Legge 13 luglio 2015, n. 107, 「国の教育制度の改革と有効な立法規定の再編のための委任」, 通称「La Buona Scuola ブオナ・スクオーラ」)

(<https://www.normattiva.it/uri-res/N2Ls?urn:nir:stato:legge:2015;107>)

政令第 60/2017 号 (Decreto Legislativo 13 aprile 2017, n. 60, 「人文文化の促進, 文化的遺産および作品の価値付けおよび創造性の支援に関する規則」)

(<https://www.normattiva.it/uri-res/N2Ls?urn:nir:stato:decreto.legislativo:2017;060>)

(インターネット)

○講演・ウェビナー

Rubino, G. (2022a) 「インクルーシブ楽器指導法:効果的な戦略とスコアの再構成」(Didattica strumentale inclusiva: strategie operative e rielaborazione delle partiture), 研究大会「楽器と学校のインクルージョン」での講演 (2022 年 2 月 25 日),

(https://www.youtube.com/watch?v=JqAka1YX_xY)

Rubino, G. (2022b) 「インクルージョンを構築する—全ての人アクセスできるオーケストレーションを実現するための原理と戦略」(Comporre l'inclusione : principi e strategie per realizzare orchestrazioni accessibili a tutti), 第 33 回全国音楽祭「音楽は学校を一つにする」での講演 (2022 年 5 月 12 日)

(<https://www.youtube.com/watch?v=UZ4f7zDcrRQ>)

○ウェブサイト

Esagramma <https://esagramma.net/>

MIUR <https://www.miur.gov.it/>

INDIRE *La musica unisce la scuola* (音楽は学校を一つにする)

<https://www.indire.it/progetto/rassegna-musicale-nazionale-la-musica-unisce-la-scuola/>

インターネット資料は 2024 年 2 月 20 日に最終閲覧。